

宮内省調度局 御中

(別紙)

記

一 短冊箱 壹個
右御置上品及御送付候也

明治二十九年六月二日

宮内省調度局 御中

東京美術學校 「同右」 印

(以上東京美術學校名入野紙使用)

同文書中には上記御買上げ一覧表以外の作品に関するものが一件あるの
で併記しておく。

記

一流シ櫻ニ鳩蒔絵小香合 東京美術學校助教
六角注多良作

右之通 明治二十九年六月二日

宮内省調度局 御中

六角注多良 「可明」 印

6 岡倉校長出張

左記の新聞記事によって、出張の目的は豊公銅像建立の準備であったことがわかる。なおこの依頼製作については本校年報には記載されていない。

○阿彌陀峰の豊公銅像

岡倉東京美術學校校長及び日野西子爵は此程京都に赴き豊公銅像建造に就き阿彌陀峯の地形等を視察し調査中なるか當初は太閤平(豊公の廟ありし處)に建立する見込みなりしも岡倉校長は同所の上の地所を撰定し十

間四方許りの臺石を据へて此處に一大銅像を建立し前設計より規模を大にし豊公の遺蹟を顕著ならしむる意向なる由又た豊公の像は高臺寺、藪内、其他二三ヶ所に木像又は畫像あるにより岡倉氏等は之を一覽し其模寫を帝國京都博物館に囑託したりと

(明治二十八年九月六日『報知新聞』)

○銅像の流行

東京美術學校に於て各地より引受たる銅像八七八個に及び其内福岡縣より依頼を受けたるハ日蓮上人高さ丈餘の銅像なるが今回又京都の有志公民より豊臣太閤の實物大の銅像の依頼を受けたり此の像成功の上ハ京都の公園内に建設する見込の由

(明治二十八年九月十八日『やまと新聞』)

関連事項

① 意匠研究会(遂初会)

意匠研究会は岡倉校長、橋本雅邦の指導のもとに絵画や図案の意匠練磨を競う会で、本年六月ごろ発足した。『錦巷雜綴』第五卷(明治二十八年六月二十六日)に次のように紹介されている。

○意匠研究会 今度本校ニ於テ題名ノ如キ一會ヲ起シ繪畫及ビ圖按ノ懸賞ヲ行ハル其趣意左ノ如シ

一本會ハ毎月一回圖題ヲ設ケ繪畫及ヒ圖按ヲ集メ其ノ競争會ヲ開キ主トシテ意匠ノ意味深長品位高尚ナルモノヲ撰ミ賞品ヲ授與ス賞品ハ一等二等ノ二種トシ一等ハ絹地反物二等ハ木綿地反

物ニシテ出品ハ本校各科二年生以上ノ者ニ限ル

意匠研究会第一回ハ六月十五日ニ開キ出品ハ十四日迄ニ本會幹事迄差出サル可シ圖題ハ入相ノ鐘但シ鐘ノ形ヲ畫ク可ラズ紙幅ハ紙又絹地タルヲ問ハズ高ケ一尺二寸巾一尺七寸ノ横物タルベシ幹事ハ下村晴三郎岡本勝元ノ兩氏ナリ第二回ハ七月十五日圖題ハ夏草ニテ十四日差出ノ

この趣意書は岡倉校長が執筆したもので、草稿が残っている（平凡社版『岡倉天心全集』第八卷所収）。

次いで『錦巷雜綴』第六卷（明治二十八年十月三十日）には次の記事がある。

○意匠研究会ハ雜綴第五卷ニ其趣意規則等ノ詳細ヲ記載シタル如ク六月初開以來毎月期日ニ本校内ニ於テ開キ批評ヲ加ヘ優等者ニハ夫々賞品ヲ與フル等獎勵至ラサル無ク課題ニ應シ出畫スル者頗ル多ク斬新奇抜ノ意匠新案モ又乏シトセサレテ怨ムラクハ兎角本會設置ノ趣意ニ悖リ校内ノ競争ニ終ルヲ如何セン希クハ校外ヨリモ出案者多カラントヲ望ムト委員ハ云ヘリ又一ツニハ普ク當月課題ノ知レ渡ラサル爲メ不計ス期日ニ遅レ出畫ノ機ヲ失スル者アル等ノ不便ヲ慮リ九月ヨリ本年内毎月ノ課題ヲ前以テ告知クルコト、ナリ左ノ如ク決定シタレバ當月ノ畫題ニ應シ續々出案アルベシ

九月 松風 十月 夢 十一月 笛聲 十二月 時雨

同会は明治二十九年三月ごろ、遂初會と改称された。すなわち同

月三十日発行の『錦巷雜綴』第七卷に左記の主意書が掲載されている。

遂初會主意 同會幹事

遂初會とハ、即ち前の意匠研究会の改名にして、會の性質は別に變更したるにあらざ。専ら題を設けて、出品を募り、その優劣高下を評定して、以て競進開發の道を圖るに在り。元來此の會は、今の美術の製作品が、一般に意味の欠乏したるを嘆きて、これを矯正すべき道やあると、會長の經營に起りたるものにして、その弊を救はむが爲に、敢て嶮題を設けて、意味の表出に勉めしむべき方向を取りたるが故に、慘憺たる意匠の練熟研究、その主となりて、おのづから意匠研究会と名づきたるなり。然れども、その所謂意味なるものハ、固より寓意の意味にもあらず。またその畫がきたる、歴史人事などの事からの意味にもあらず。即ち眞の美術上の想隨なるが故に、これを表出せむがため意匠の趣向、往々横岐に走りて謎語標識的手段を取るものあるに至りては固より此會の本意にあらず。されば此會の研究せむとする所は、元來理想に在りて、意匠にはあらずといへども、想隨は意匠に據らずして形相の上には現はるゝことを得ざるものなればその練熟は、終に意匠の研究を餘所にすること能はざるが故に、その營む所に就て、意匠研究会といふも、固より當らざるにあらず。然れども、これその第二段の目的にして、本會の主意は、落想の初一念を作品の上に飛動せしむことに在るが故に、その手段を以て、目的とするにはあらず、意匠の研究を以て、本義の目的とする時は

往々彼の蹈花馬蹄香の如き、標幟謎語に近きものに陥り易き弊あるを以て、實の資たる會にハ、固よりふさはしからぬ嫌あり。設題は元來製作の興を構へて、想隨を成立せしむべき目標たるに過ぎずといへども、よくその落想の初一念を、作品の上に表出し得るときは、題目の理想は、宛然筆墨の間に飛動すべし。こゝを以て、本會の出品を評査するや、意匠の趣向に取らずして、主として意味の表現に資る。興會の初一念を遂ぐることは、誠に藝術の能事なりとす。これ本會が、名を改めて遂初會と稱する所以なり。

此主義を以て美術の高下優劣を査定せば、庶幾はくは、その正鵠を得て美術家をして、横岐の路に入らしむる弊なからむ。題に應じて製作を出だすもの、よく此義に據りて、その興會の初念を遂げむと企て、意匠の趣向に走ることなくば、課題の作品に於て、卑しむべき匠氣を絶ち、渾然たる神來の趣を得む。たゞその題に據りて構思したる初一念ハ、誠に作者の心術にして、製作の巧拙善悪は、一にこれに因りて軒輊すべし。興會の初念高尚なれば、これを作上に遂げ得たるとき、作品従ひて高尚なり。もしその初一念にして卑俗ならむにハ、技倆は如何に巧みなりとも、意想既に觀るべき所なし。美術として取るべきもの、何處にか存する。これ本會の最も重きを置く所なり。されどその初念のみ、如何に高尚善巧なりとも、よくこれを作上に遂げ得べき技術なければ、製作ハ終に成立するの期なかるべし。これその表現を遂げ得ることの、また美術上に重要な所以なりとす。初念の構成と、表現の遂成とハ、誠に美術の兩輪にして、また本會の大主意なり。本會の設題、往々峻に過ぎて、文學を以てするにあらざれば、全然

これを見はし得難きものあるべしといへども、これその作家をして、初念の興會を喚起することを練熟せしめむとするに外ならず。今の意味に乏しき美術に對して、これを望むの老婆心、蓋し茲に出でざるを得ざればなり。技術家もしこれに由りて、その心想を練らば、大成を他日に期すること、また甚難きにあらざるべし。遂初會の營むところ、その益豈少からむや。聊本會の主意を述べて、設題に應ぜんとするものに告げ併せて出品を望むと云爾。

この主意書は大村西崖によって『京都美術協會雜誌』第五十一号（明治二十九年八月）に転載され、京都の画家たちにも告知された。

文面に明らかたように、遂初會は、美術作品の良し悪しを決定するのは作者の発想であるから、優れた発想を喚起する訓練が必要であるとして、一定の画題によって制作を行わせ、提出された作品については発想の如何を第一義として批判し、優劣を決定するという方法をとった。表現上の技巧よりも作者のいわば心もちが作品に現れることの方が大切だという岡倉や雅邦の考え方を浸透させることが目的であったようだ。

画題を与えて制作させ品評するという研究会形式自体は遂初會ないし意匠研究会が最初というわけではなく、日本美術協會でそれ以前から行われていたことである。また、これは最近の発見であるが、意匠研究会以前に本校内でこの種の研究会が存在していたことを示す作品群も残っている。それは川勝勘兵衛（明治三十年絵画科卒業後帝室林野管理局勤務。号寿明。昭和三十一年没）旧蔵の「画叢」七

冊で、川勝のほか高橋鳥谷、木村武山、中山翠洲その他多数の同級生ないしそれに近い学年の生徒の絵が二百枚近く収録されており、一冊ごとに異なった手描き図案の表紙が付けられている。表紙に記された巻数によれば、はじめは少なくとも十五巻はあったようだ。第十一巻には「明治廿有七甲午歳一月編集」と記されており、意匠研究会発足以前のものであることがわかる。収録されている作品は全て二一・七×三三・五cmの枠内に墨または墨と淡彩をもって描かれており、中に「一等賞」とか「二等賞」とか鉛筆で記入がなされているものがあり、競技会の出品を集めたものであることを示唆している。同一テーマで描いたことがわかる複数の作品が含まれているところを見れば、やはり意匠研究会のような一定の画題による制作競技会があり、「画叢」はその際の作品集だったのでないかと考えられるのである。

意匠研究会ないし遂初会は毎月一回、本校内または岡倉校長の自宅で開かれた。画題は上記のものに引き続いて和氣、寒雲、春如海、無我、春陰、春雨、勇猛、寒、傲慢、たそがれなどが順次出題された。鳥谷幡山（明治三十一年中退）は観音という画題に応募したことがあったが、雅邦はほかに技法的に優れた作はたくさんあったにも拘わらず、幡山の作には慈悲の相がよく現われているからという理由で最高賞を与えたといっている（『回顧六十年』昭和三十三年十月、鳥谷画房）。雅邦が菱田春草の卒業制作「寡婦と孤児」を推賞したのもこうした指導方針の現われとみられる。また、平福百穂も参加者の一人であったが、当時を回顧して次のように述べている。

岡倉先生は當時の畫學生を網羅して、進歩した研究を續けたもの

だ。一定の畫題によつて、美濃版二枚位の畫を持ち寄つて先生の批評をうけた。先生の批評は丁寧であり、親切であつた。學校以外の青年も先生の宅によく集まつてきた。先生は集まつた作品を鑑別したうへ、等級を附して自分の懐中から、賞品を出して與へるといつた風であつた。觀山、春草、素明の諸君はいつも清新なものを書いて優賞にあづかつたことを記憶してゐる。

同会はのちに彫刻科や日本青年繪画協会からの参加も認め、活氣ある研究活動が続けたので、一つの革新勢力として注目されるようになった。例えば吉岡芳陵などは次のように述べている。

「上略」○青年畫家は自ら分ちて二派を爲すを得べきか、一は美術學校派一名橋本雅邦派一は美術協會派是なり。雅邦派は今や美術協會派の一部と相提携して、東洋畫革命の創業家たらんとする意氣相互の間に見ゆ。彼等は雅邦の龍虎に勵されて、氣局稍大なるに至り、何時迄も師風墨守の旧志想中にさまよふことの非なるを悟り、各派調和して一生面を開かんと企て、或は畫に精神を顯はさんと勉め、或は広く宇宙間に新畫題を求めて理想的の畫を作りつゝあり。

此等の青年畫家は美術學校内の意匠奨勵會に入りて、創立者たる橋本雅邦氏と共に其研究に勉む。此會の起りしも昨年にして毎月題を課し賞を附す。「夢」「時雨」等は昨年未の畫題。今年は一月は「和氣」二月は「寒雲」三月は「春如海」と定められしと聞く。各自其こゝろの畫に顯はるゝを期するものにて、今月の「和氣」、三月の「春如海」の二題などは其漠たる所に畫家腦を苦

むの面白味あるべし。

(明治二十九年一月一日『毎日新聞』「現在の絵画界—東洋画(上)—」)

芳陵の言うように意匠奨励会(正しくは意匠研究会)を根拠地として「美術学校派」または「雅邦派」の面々は各自のころ(または精神)を画に頭わすことに努め、理想(理想主義)的作風を開拓しつつあった。こうした活動が前提となつて、岡倉らの日本画革新運動は大きく進展することになる。

『京都美術協会雑誌』第四十九号(明治二十九年六月)の意匠研究会記事



評 能く題意に副ひ全局瑕瑾を見す

なお、意匠研究会(遂初会)の活動は明治三十一年のいわゆる美校騒動のあとは日本絵画協会へ引き継がれた。

○五六月の意匠研究会 東京美術学校の例月意匠研究会は、遂初会と號けられ、毎月十三日に開かる、去五日の繪畫の課題は『五月雨』にて、一等賞は下村觀山氏、二等賞は岡山秀氏なり、彫刻の課題は『勇猛』にて三等賞は天岡均一氏か得たり、今左に一等賞の略圖を掲ぐ

本月は諸課を通して『獨』といふ題にて、一等賞鑄金三年生山本茗治郎氏の彫塑、二等賞彫刻一年生波邊長男氏の彫塑、卒業生菱田三男海氏の繪畫、三等賞は助教諭沼田弟治郎氏の繪畫にて、一等二等の塑形略圖と、此日番外として出品したる、橋本雅邦氏の圖畫を略して左に掲ぐ、來る七月は繪畫塑型とも通して『笑中涙』の題なりと

〔獨〕題課型塑



賞等一

作氏郎次茗本山

評 老來眷顧する所なく閑獨靈蹟を巡拜するものゝ如く客俗の氣既に銷して高古の情自ら見ゆ

〔獨〕題課型塑

評 琴瑟樂缺けて反側情哀れなり跪坐首を垂れて秋思孤棲を思ふに似たりたゝ古意高情の乏しき而已



賞等二

作氏男長邊渡